

(2月4・5・6日実施)

出題意図

一般入試 [第1期] では、マークシート方式を採用し、英語の基礎的な知識と読解力を確認することをねらいとしている。出題者が受験生に求めているのは主として次の点である。

- ①基本的な英文法・英単語・熟語をマスターしていること。
- ②語句の意味・用法と文法を正確に踏まえ、英文を総合的に理解できること。
- ③英会話に親しみ、会話の流れを理解できること。

講評

3日間を通じて出題形式は共通である。以下、2月4日の試験に沿って講評する。

① 長文総合問題。英文要旨：動物には音やしぐさ、触れ合いなど様々なコミュニケーション方法がある。例えば猿は外敵の種類によって仲間に出す警告音を変え、蜂は特有の動きで餌のありかを仲間に知らせる。また象やキリンは互いの鼻や首を絡ませて親愛の情を示す。人間にも動物と同様に意思疎通を図る多様な方法がある。

設問1 下線部(1)のsendは情報や意図、感情などを「伝える」という意味の動詞。正答はア。

設問2 下線部の語の意味を選択する問題。(2) formは「種類」という意味の名詞で、正答はイ。(3) obviousは「すぐにわかる」という意味の形容詞で、正答はア。(4) amazingは「驚くべき」という意味の形容詞で、正答はイ。

設問3 空所補充問題。空所Aのあるセンテンスは、外敵に「気づいた」際に猿が警告音を出すことを述べている直前のセンテンスと同様のパターンであり、正答はウ。空所Bには選択肢イが入り、in patterns「一定のパターンで」という意味になる。空所Cは、親愛の情を示す接触を論じる段落内にあり、接触で「強める」のはアのbonds「絆」である。

設問4 下線部の意味を選択する問題。(あ)では、identifyは「(～の身元を) 特定する」という意味で、itはEach dolphinを指している。正答はイ。(い)では、with+名詞+補語で付帯状況を示し、「背中を高くした状態で」という意味になる。正答はウ。言葉以外の意思疎通手段について述べる最終段落にある(う)では、without wordsは「言葉を使わずに」であり、way+S+Vで「SがVする方法」という意味であるため、正答はア。

設問5 本文の内容に合う英文を選択する問題。第1段落では、人間と同様に動物も互いに意思疎通を図ることが述べられており、第2段落で、動物には様々なコミュニケーションの方法があることが述べられている。正答はウ。

② 会話文の問題。MariはRinaのサマープログラムの申し込みを手伝っており、申し込みフォームに入力が必要な長所やリーダーシップの経験について、二人で一緒に考えている。

設問1 下線部の語句の意味を選択する問題。(1)の正答はウで、「長所、強み」という意味になる。(2)のconsideration「思いやり」に最も近いものはア。(3)はhave disciplineで「規律がある」、すなわち自己管理能力があることを表しているため、正答はウ。

設問2 空所補充問題。空所Aの直後にサマープログラムの申し込みをしようとしているため、プログラムには乗り気であることが分かり、正答はウ。空所Bに対し、Rinaが申し込みで記入すべき情報を答えており、正答はイ。空所Cの後に「イニシアティブを取れ」と促しており、指示待ちのRinaをたしなめていると分かる。正答はイ。

設問3 下線部の意味を選択する問題。(4)「あなたのためにこのサマープログラムを見つけたのは私だった」という意味で、正答はア。(5)「意地悪くする必要はない」(＝意地悪しないで)という意味で、正答はア。(6)「私に思い出させて」(＝話してほしい)という意味で、正答はウ。

設問4 本文の内容に合うものを選択する問題。文化祭でアイリッシュダンスをしようというRinaのアイデアにクラス全体が盛り上がったと自身で言っており、正答はウ。

③ 短文空所補充問題。1. fansを修飾する形容詞であるウが入り、「興奮したファン」という意味になる。2. 電車に乗り遅れるのは、必要な行動がなされなければ起こることであり、正答は「さもなければ」という意味のイ。3. 譲歩の接続詞thoughがあり、好条件に反する結果となるため、エが正答となり、申し出をturn down「断る」という意味。4. 譲歩(「疲れていたにもかかわらず」)を表し、予想に反する結果を導くため、正答はエ。5. as+副詞+as+S+couldで「できるだけ～」という意味になり、正答はイ。6. 主節から仮定法過去完了だと分かり、「もし～していたら」という意味のHad+S+過去分詞とするため、正答はア。

④ 並べかえの問題。1. were surprised by the という順番になる。2. for the sake of ～は「～のために」という意味。3. of+名詞で「～の性質をもつ」という意味になる。

受験生へのアドバイス

出題者が受験生に求めているのは、オーソドックスな学習の成果であり、高校のリーディングの教科書がきちんと理解できる力がついていれば解ける問題であると考えている。

ただ、「きちんと」理解できることが重要であり、「なんとなくわかる」というレベルでとどまらないようにしてほしい。基本的な単語・熟語の習得はもちろんのこと、英文の構造をしっかり把握して、一つ一つを論理的に正確に理解していくことが、外国語学習においては特に重要である。

〈2月4・5・6日実施〉

出題意図

一般入試 [第1期] の問題は、例年と同じく大問2題からなる。

大問1は四字熟語の完成、漢字の部首名の把握、漢字熟語の組み立てや音訓の理解、慣用句や文法、近現代文学史の知識など、基礎的な国語力を問う小問9題から構成されている（約4割）。

大問2は読解問題であり、4,000～4,500字程度の説明的文章（論説文）を、正しく読み取ることができるかを問う小問を設けている（約6割）。なお読解の前提として本文中の漢字の表記について問い、そのうえで著者の主張への理解を問うという構成になっている。

いずれの問題も、大学入学後に必要な国語力を試すものである。

講評

大問1については、基礎的な国語知識が問われるため、日頃から四字熟語や慣用句など、知っている語彙を増やしておくことが重要である。また漢字熟語の構造など、言葉の成り立ちに関心をもっていることが望まれる。近現代文学史については、高等学校の国語教科書や便覧に載っている範囲で出題されているため、それらをよく見ておくことが必要である。

大問2で出題した長文の内容について、日程ごとに以下に述べる。

いずれの文章も軸となるテーマがあり、そのテーマを論じるために先人の見解や、実例が紹介、解説されるという構造をもつ。そのため、まずは文章の軸となるテーマを理解することが読解のポイントとなる。

2月4日は岡田温司『人新世と芸術』から出題した。課題文は、まず、エコロジーとエコノミーという現在では相性がいいとは言えない言葉が、実は「オイコス」という共通のルーツを持っていることを提示する。そのうえで、それがどのような経緯をたどって現代のような状況に至ったのか解説していく。まずは、「自然のエコノミー」という語をめぐる初期キリスト教時代の神学者たちの考え、あるいはリンネやディグビーの認識を理解する必要がある。その上で、ダーウィンが同じ「自然のエコノミー」という言葉を使った時に、その意味合いにはどのような変化がみられ、その変化にはどんな意味があるのかを解説する。さらにフンボルトにおける芸術と自然の関係などが論じられるが、それぞれの主張を根気強く読み取ることが重要である。

2月5日は、藤田正勝『日本哲学入門』から出題した。出題箇所は、和辻哲郎の『風土』について解説している箇所である。和辻哲郎の哲学は一見やや難解に感じられるが、著者の解説にしたがって読み解けば、理解しやすい。出題もそれぞれの文章展開のポイントを押さえる形でしており、順番に問題に答えることで、全体の理解が進むようになっていく。具体的には、なぜ和辻は「自然」と呼ばず「風土」という言葉を使ったのか？和辻は私たちの意識のはたらきをどのように説明しているのか？和辻に対する批判に対して著者はどのような意見を持っているのか？和辻の述べる「風土への超越」とはなにか？などである。いずれも傍線箇所の近いところに解説があるため、難易度は必ずしも高くない。初見の印象に惑わされず読み進めることが必要である。

2月6日は、藤川直也『誤解を招いたとしたら申し訳ない 政治の言葉／言葉の政治』から出題した。この文章は、私たちのコミュニケーションを可能にしている言葉を社会インフラの一つとして捉えるところからはじまる。そのうえで、インフラとしての言葉に不都合が生じたら、改良したり、あらたな言葉や概念を作ったりする必要があるという、いわゆる概念工学の考え方を紹介していく。メタ意味論の説明などは一見難解に感じられるかもしれないが、著者は概念工学を説明するために多くの例（「惑星」、「結婚」、「水」、「樵」と「楡」など）を提示しており、それぞれの例の説明を着実に読み解いていけば、著者の主張を理解することができる。

なお全日程を通して、先に各部分の読解を問い、それを踏まえて文章全体の理解を問うという形をとっており、各設問が全体理解のガイドとなるように設定している。

受験生へのアドバイス

大問2に関しては、説明的な文章（論説文）に慣れておくことが重要である。論説文は一見読みにくく感じられるかもしれないが、必ず筋道に沿って書かれている。それをたどれば著者の主張を知ることができ、その主張を補強するために紹介されるさまざまな例も理解することができる。一見難解に感じられるかもしれないが、論説文の文章は筋道から外れることはなく、また書かれていないことが出題されることもない。さらに、本当に難しいところには必ず著者の解説が付されている。第一印象にとらわれることなく、根気強く読んで慣れていってほしい。

大学での学びにおいて、論説文を読みこなすことは、必要不可欠の基礎力である。新聞や新書、現代文の問題集など、より多くの論説文を読むようにしてほしい。

〈2月4・5日実施〉

出題意図

一般入試 [第1期] の問題は、高等学校世界史で学習する内容をきちんと理解しているかどうかを確認するため、次のような点に配慮して出題した。

第一に、高校の教科書に準拠した問題であることである。すなわち、多くの教科書に記述されているような、基本的な内容を問う設問とした。第二に、全体として地域・時代の偏りが少なくなるよう、できるだけ広い範囲からバランスよく出題することである。第三に、さまざまな角度から理解度を測定するために、地図や図版を使用した問題を出題することである。教科書に掲載されているような地図や図版から出題し、本文だけでなく参考となる資料にも目を通すことができているかを問う設問とした。単に用語を覚えるだけでなく、例えば地名であれば地図上の位置を確認するなど、視覚的にとらえることが求められる。

講評

出題意図に沿って、次のような構成とした。まず、1日目の①は古代国家の形成から李朝建国に至るまでの朝鮮史の問題、②は古代からポルトガルによるマラッカ王国占領に至るまでの東南アジア史の問題、③は都市や商業が急速に発展した中世ヨーロッパの経済交流史の問題、④はロシア革命やヴェルサイユ条約など第一次世界大戦前後のヨーロッパ史の問題である。

次に2日目は、①は殷から周、春秋・戦国時代を経て秦の統一から滅亡に至るまでの中国古代史の問題、②は紀元前4世紀末のマウリヤ朝から仏教の衰退・イスラム勢力の進出に至るまでのインド史の問題、③は砂糖や木綿といった世界で広く取引された「世界商品」の歴史をめぐる問題、④は18世紀の領土拡大から20世紀初頭の革命直前に至るまでのロマノフ朝を扱ったロシア史の問題である。

2日とも、地図・図版を使った問題を出題した。地図では、1日目の④で第一次世界大戦後のヨーロッパでヴェルサイユ条約によるラインラント非武装地域を選択する問題を設けた。図版では、2日目の①で殷で使用されていた甲骨文字を選択する問題を出題した。

また、2日目の③は比較的平易な概説書から抜粋した文章を読んでもらい、その内容に関連する事項を問うものである。出題内容は全て教科書の範囲内であるが、世界史に関する様々な著作を読む機会をもってもらえればと思う。

1日目について解説する。①の間5朝鮮半島の仏教についての問題で、「高麗の時代に仏国寺が創建された。」を正しいとする誤答、④の間7ソヴィエト＝ロシアの新経済政策（ネップ）についての問題で、「計画経済により重工業化を推進した。」を選択する誤答が多かった。前者は高麗が仏教を国教にしたため、朝鮮の歴史で仏教といえば高麗であるとのイメージが強くなってしまっているための誤答で、後者はネップとそれにかわって開始された第1次五カ年計画の内容と混同しているための誤答であろう。

教科書レベルの内容であっても、大まかには覚えていたが、細かい点は記憶が曖昧になってしまっていて、正解にたどりつけていないケースが間々見られる。時代の流れの中で、起こった出来事や登場する人物などを整理して、混同することなく筋道立てて理解していく必要がある。

先にあげた問題以外でも、近現代史の問題に不正解が目立った。近現代になると国家間の関係が複雑になり、特に条約の内容などは混同してしまう傾向があるが、前後の出来事と結び付けて正確に理解していくことが求められる。また時代順に勉強を進めていくと近現代は手薄になりがちであるが、自分自身が生きる現代に至るまでの流れをしっかりとして習得しておいてほしい。

受験生へのアドバイス

本学世界史の問題は教科書の範囲内で解答できるものばかりであるから、次のようなオーソドックスな学習をきちんと積み重ねていくことが何より大切である。

第一は、教科書をよく読み、その内容を把握することである。ただ単に目で文字を負うだけでは不十分で、要点を自分でノートにまとめることが、遠回りに思えても、やはり最も効果がある。時間がない時でも、ただ教科書を読むだけでなく、かたわらにメモ用紙を置いておき、読みながら重要な語句や気になったことを実際に書いてみるなど、手も同時に使っていくとよい。

第二は、教科書の地図や図版に注意を払うことである。世界史の教科書に載っている各種の地図は、それぞれの時代を理解する上で特に重要度の高いものである。位置や地形、立地条件などを確認しておく。また、図版に示された建築・絵画・彫刻作品などは、特徴を自分なりにつかんでおくことである。

第三に、歴史用語を表面的に記憶するだけでなく、できるだけ具体的なイメージを描いて理解していくことである。教科書だけでなく、資料集・図版集などの副読本も活用し、豊かなイメージを養っていくことが大切である。

〈2月4・5日実施〉

出題意図

日本史の問題は、1日目（2月4日）、2日目（2月5日）ともに①～④の大問で構成した。いずれの設問も、高等学校日本史の内容に準拠したもので、日本史についての基礎的な知識と理解度を問う内容となっている。日本史のなかには政治・経済・文化・宗教などのさまざまな分野がある。それら多様な分野に関する理解、そして特定の歴史上の出来事を通時代的に理解する力、さらには異なる分野との関連性を把握する力、および日本史を理解する上で重要な史料読解の基礎能力を確認しようとしたものである。

1日目・2日目ともに、大問①は特定の時代の分野史を取り上げた設問で、3つのリード文を読み、文中の10箇所が付された下線部の語句や人名についての正誤を判断する設問である。大問②は、通時代的な特定の分野史で、時代ごとに3つのリード文を読み、空欄と下線部に関する8つの設問に解答する。大問③は、史料読解に関する問題で、時代や分野の異なる2つの史料を読み、その内容に関する6つの設問に解答するものである。大問④は、時代を限定した分野史で、3つのリード文に設けた15の空欄に、語群から正答を選択する設問である。配点は大問①が30点、②が24点、③が16点、④が30点であった。

講評

大問①は、南北朝～戦国時代の文化史に関する問題（1日目）、明治時代の外交史に関する問題（2日目）を出題した。大問①は、日本史上の出来事・人物・文化などについての基礎的な知識・理解力を問う問題である。2日目は比較的よくできていたが、1日目は少し難度が高かったようである。特に、室町後期の絵師で土佐派を確立した人物を問う問題（解答番号9）は誤答が目立った。比較的著名な人名である。この時代は政治的な側面が印象強いかもしれないが、学問や文芸の発展についても広く理解しておくことが望まれる。

大問②は、貨幣経済に関する通時代史の問題（1日目）と、宗教美術に関する通時代史の問題（2日目）で、ともに古代から近世にかけての範囲で出題した。例年この大問②は、基礎学力をふまえたうえでの通時代的な理解度を問う箇所である。両日ともに正答率はやや低めで、とくに2日目の中世前期の絵巻物に関する問題（解答番号15）、および近世初期の屏風絵に関する問題（解答番号17）は、ともに説明文の正誤を問う形式だった。歴史用語の暗記だけでなく、事象を具体的に叙述した文章を丁寧かつ正確に読み解く能力も養っておく必要がある。

大問③の史料問題は、『教令類纂』から1715年の海舶互市新例に関する問題と、『青鞥』から明治時代の女性史に関する問題（1日目）、『類聚三代格』から延喜の荘園整理令に関する問題と、『耶蘇会士日本通信』から戦国期の堺に関する問題（2日目）を出題した。大問③は、史料の読解力と、内容を歴史の文脈に位置づけて把握する力を確認する問題である。1日目の『青鞥』の著者や史料内容を問う問題（解答番号22・23）と、2日目の『耶蘇会士日本通信』の記載内容を問う問題（解答番号23）は、正答率が高かったが、全体をとおして史料に即した問題に不慣れな感があるので、暗記だけでなく史料に立脚した歴史の把握や時代背景の理解を心がけることが望ましい。

大問④は、5～7世紀の古代政治史に関する問題（1日目）と、近世前期政治史に関する問題（2日目）を出題した。大問④は時代と分野を限定したもので、基本的な事柄の理解を確認しようとする問題である。1日目・2日目ともによくできていた。ただし、1日目の大王直轄民の用語を問う問題や推古天皇が誰の後かを問う問題（解答番号27・34）、2日目の郷帳を問う問題（解答番号25）は誤答が目立った。著名な歴史用語によるうわべの知識だけでなく少し踏み込んだ知識も把握し、関連する情報を幅広く暗記しておくことよ。

繰り返しになるが、政治・経済・思想・文化などの諸分野は、それぞれ独立して展開しているのではなく、相互に影響を与えあいながら、各時代の歴史を形成している。個別の事柄の内容を把握すると同時に、同時代の諸要素とのつながりを常に意識して、より深く広く理解しておいてほしい。

受験生へのアドバイス

本学の日本史の問題は、いずれも教科書に準拠した内容となっている。出題の形式も傾向もほぼ例年どおりであった。そのことをふまえたうえで、以下の点に留意してほしい。

まず、教科書に記された内容（本文だけではなく、欄外に記された事柄や、トピックについても）を十分に把握するために、独自のノートを作ってまとめておくことよ。そして、これも例年のことではあるが、起こった出来事や年代について、個別・単体で暗記するのではなく、そこに関わった人物や時代背景などとの相互関係の中で位置づけて把握できるように、歴史の流れについて政治・経済・文化といった分野別にノートで整理し直してほしい。さらに、時代ごとの大きな特質をつかむことを心がけることで、個別から総体的かつ体系的な理解が可能となり、必然的に各分野の関連性が把握できる。

次に、教科書に掲載されている地図や表、注記や史料にも日頃から関心をもってよく読んでおいてほしい。これらの箇所には、各時代の地理的な状況や統計的な情報が簡潔にまとめられており、これらもあわせてノートに整理しておくことが大切である。地図・表・史料は、教科書に記述されていることの証拠となる重要な根拠資料であり、その内容を十分にふまえたうえで、改めて教科書を読みなおすことが重要である。また、「用語集」や「史料集」も活用する必要がある。とくに史料集は、各時代の特質をまとめなおす際に、当該期の代表的史料をあわせて読んで、史料と関連づけて歴史の展開を把握したい。歴史的事実を確認することはもちろんのことであるが、解説などを熟読して総合的に歴史を理解するような学習に取り組んでほしい。

〈2月4・5日実施〉

出題意図

基本的な出題方針は次の3点である。(1)教科書に準拠し、各分野の基本的知識を広く問う。(2)社会的な事象に関する図表やグラフを正確に読み解くためのデータリテラシーを問う。(3)時事的な社会問題を取り上げ、教科書の内容を応用的に理解できるかどうかを問う。

講評

「公共」の問題は、2月4日、2月5日ともに大問①～④で構成し、合計40の小問を出題した。

2月4日実施分：①は《地方自治》についての問題である。条例の制定や改廃、首長や地方議会の解職請求、住民投票をはじめ、地方分権改革や地方自治が抱える課題など、地方自治に関する基礎知識について幅広く出題した。さらに、地方自治体によって提供されている日々の生活に不可欠なサービスについても取り上げた。②は《戦後の日本経済》についての問題である。経済の民主化や好況期の順番、高度経済成長に関わる基礎的な知識の理解を問うた。また、1980年代以降の経済危機や企業の倒産のほか、時事問題として実質賃金・名目賃金・消費者物価指数の推移に関わるグラフ問題を出題し、現代の日本経済と国民生活に関わる理解を問うた。③は《南北問題や南南問題》についての問題である。国連貿易開発会議、政府開発援助、持続可能な開発目標など、経済格差の是正や貧困解消のために国際社会でなされた取り組みに関する問題を出題した。また、日本の政府開発援助の特徴についても取り上げた。④は《近現代の哲学・思想》についての問題である。とくに西洋近代において展開されたドイツ観念論や実存主義の哲学について出題した。またそれらに加え、近代社会において現れた公共空間に関するアーレントやハーバーマスの議論も取り上げた。いずれのテーマにおいても近現代の代表的な哲学者や思想家たちが、どのような思索を積み上げてきたのかについて、教科書レベルでの理解を問うた。

2月5日実施分：①は《日本の裁判制度》についての問題である。裁判の基本原則をはじめ、裁判員裁判制度や再審制度など、裁判に関する基礎知識について幅広く出題した。また、死刑制度や冤罪事件を取り巻く時事的な事柄についても取り上げた。②は《労働者の権利と雇用・労働問題》についての問題である。労働三権と労働三法に関する基本的知識や、近年の労働問題への政策的対応について出題した。また、時事問題として働き方改革など雇用・労働問題への政策的な取り組みについても取り上げた。③は《戦後の日本を取り巻く世界情勢と在日米軍との関わり》に関する問題である。日本国憲法と平和主義、警察予備隊と自衛隊の成立の背景、サンフランシスコ平和条約、日米関係に伴う条約と協定等に関する問題や沖縄の基地負担軽減に関する地図問題など幅広く出題した。④は《人間の発達過程や欲求・葛藤》についての問題である。ライフサイクルで生じる発達課題や青年期の特徴について基礎的な知識について出題した。また、発達に関する研究に大きな影響を与えたレヴィンやハヴィグアストらの議論も取り上げた。

以下では、2月4日、5日の各試験結果についてそれぞれ講評していく。

2月4日実施分：大問①の地方自治に関する問いでは、地方自治体が提供する住民サービスや地方議会に関する設問について、概ね正答率が高かった。一方、地方財政に関する設問では、正答率がやや低調だった。②の戦後の日本経済に関する問題では、各小問の正答率にばらつきが見られた。問3や問4のような報告書名や人名を問う問題の正答率が良好であった一方で、高度経済成長の特徴や経済危機によってもたらされる生活への影響について問う設問では、正答率は低調であった。③の国際社会における経済格差是正の取り組みに関する問題は、各小問の正答率にばらつきが見られた。貧困や格差解消のための取り組みについての設問は概ね正答率が高かった。一方、ODAの実績に関して表の内容を読み取る設問は、正答を導き出すためには複数の情報と知識の組み合わせを要したためか、正答率が低かった。④の西洋近代哲学や公共空間に関する設問では、教科書レベルの基本的な知識を問う問題であったが、全体的に通ってやや低調な正答率であった。

2月5日実施分：大問①の日本の裁判制度に関する問いでは、裁判の仕組みや裁判員裁判制度について基礎的な知識を問う問題の正答率は良好であった。一方で、冤罪事件や司法制度改革などについては、時事的な知識も要したためか誤答が目立った。②の労働者の権利や働き方改革に関する問題では、非正規雇用の拡大に関する設問の正答率は低調であったが、それ以外は全体的に良好であった。③の世界情勢と在日米軍に関する問題は、各小問の正答率にばらつきが見られた。安全保障に関する法律や日米地位協定に関する設問は正答率が好調であった一方で、アメリカ軍の基地拡張に関する設問の正答率は低調であった。④のライフサイクルや発達課題に関する問いは、概ね良好な正答率であった。ただし、欲求が満たされないことによって生じる葛藤に関する設問では、文章に書かれている状況を整理して考えることが必要だったためか、やや低調な正答率であった。

受験生へのアドバイス

公共の問題は、基本的には教科書の内容に準拠したオーソドックスな知識を幅広く問う内容となっている。教科書の本文だけでなく、欄外に記載された内容からも出題されるので、受験生は、教科書を隅々までよく目を通し、各トピックに関する理解を掘り下げてもらいたい。またグラフや図表を読み解くための実践的な力を問う問題も出しているため、教科書では読み飛ばしがちな図表にもじっくりと向き合ってデータリテラシーを身につけてもらいたい。また日頃から意識的に新聞などにも目を通すことを心がけ、国内外に関する時事問題にも広く触れるようにしてもらいたい。その際、SNSを通してニュースに触れている場合、受け取る情報は自分の関心のあつた内容のものに限定されがちになることには留意が必要である。また統計的なデータをアップデートしておくことは、国内外の動向に関する具体的知識を具えるために望ましい。公共の教科書で学ぶ内容を、マスメディアから取得した時事的な情報と関連づけながら理解を掘り下げていくことによって、興味を深めながら受験勉強に取り組むことができるはずである。また時事問題のように、教科書の内容から派生して出題される問題では、リード文にならかのヒントがないか注意深く読むことも重要である。そうした解法に慣れておくためには、過去問題に取り組んでおくことは必須である。

〈2月4・5日実施〉

出題意図

高等学校での数学学習の基礎となる数学Ⅰ・数学Aから幅広く出題した。2日間とも大問4題を設定した。問①では、数学Ⅰ・数学Aの基礎的な理解度をみるために5問の小問を出題した。それ以外の問では、数学Ⅰ・数学Aの各分野から出題した。

問①では、数学Ⅰの「数と式」、「データの分析」、「集合と命題」ならびに、数学Aの「場合の数と確率」から出題した。いずれも、基本的な数学の概念や考え方、計算や数式の処理についての理解を問う問題である。

問②では、数学Ⅰの「2次関数」から出題した。

2次関数については、性質やグラフの形状等についての理解を問う問題である。放物線の頂点の座標、軸との交点などを具体的なグラフのイメージを持つことが必要である。

また、係数に未知の定数を含む場合に、それらの定数の値と放物線の位置や形状との関係を正しく扱うことが求められる。

問③では、数学Aの「場合の数と確率」から、さいころの目の出方に関する問題を出題した。

場合の数や確率の求め方についての的確な理解が必要である。また、さいころの目の数値の整数としての性質の理解や、さいころによる試行によって起こる結果についての適切な理解が求められる。

問④では、数学Ⅰの「図形と計量」および数学Aの「図形の性質」から、2つの三角形から構成される図形における面積や線分の長さに関する問題と、一部の辺の長さが与えられた四面体において、角度・線分の長さ・面積・体積などを求める問題を出題した。

前者では、図形内の一部の点が同一円周上にあることをふまえ、角度や線分の長さの間に成立する関係を見きわめる必要がある。

後者では、立体図形における線分の長さや角度の関係を把握する必要がある。

講評

2日間ともに、問②～問④のそれぞれについて、終わりの方の設問の正答率が低かった。問②～問④では、はじめの方では、比較的基礎的なことがらを問い、それらをふまえた応用的な問題を終わりの方に置いている。終わりの方の設問に正しく解答できないのは、応用的な問いを適切に扱えていないということが考えられる。

問①は基本的に正答率が高めだったが、2日目の問①における、部分集合の個数を問う問題の正答率が低くなっていた。部分集合を単純に数え上げようとすると、手間もかかり、数え上げの見落としも起こりやすい。これを、「それぞれの要素を『取るか、取らないか』」を考える問題としてとらえることで、問題を取り扱いやすくなる。このように、見方を変えることは、情報の理論やデータサイエンスにもつながるので、問題を違う向きからとらえることは、多くの場面で重要である。

2026年度は、必ずしも典型的とはいえない問題を含んだ中で、確実に得点することのできた受験生と、苦戦することになった受験生とが分かれる結果になった。

数学の公式をそのまま覚えるのではなく、その意味や応用場面を意識しながら、問題に取り組むように心がけてほしい。いずれの問題も教科書をきちんと勉強すれば解けるレベルであり、章末問題や課題学習などを解きながら、数学が現実場面でのどのように活用されているかを意識しながら勉強することを心がけてほしい。

受験生へのアドバイス

数学は、論理を順序立て思考を構築することを学ぶ教科である。論理的な思考は、理系のみならず、文系においても必要となる。例えば文章を執筆するときに、論理的な構成を考えなければ、誰も筆者の意図を理解してくれないだろう。そのためには、単に公式を暗記するだけではなく、なぜそのような公式が導かれるのか、公式の根本的な部分を理解しておくことが必要である。

また、数学Ⅰや数学Aの範囲であっても理工系の専門分野だけでなく、文系といわれる、社会学系や人文科学系の分野でも応用されることが増えてきている。数学には、対象をどうとらえ、どう取り扱うかという、考え方の枠組みを提供する学問という側面がある。大学で志望する専門分野が文系だから数学が必要とされないわけではないことを意識して、数学の勉強を進めていくことも必要である。

入試では、時間の制約があるため、慌ててしまうこともあるだろうが、日頃から計算に親しむことで単純なミスをしないうように心がけたい。そのためには繰り返しの練習も必要である。本学の試験問題に類似した問題を問題集などから拾い出して実際に解いてみる。そして、その過程で解答が合わない場合には、どこをどのように間違えたのかを自分自身で確認しておくことが必要である。そうすることで、大問の後半で計算結果が合わない場合に、どこで間違えたのかを試験場でも認識できる力がつくだろう。

ともすると、間違えるということに対して否定的にとらえてしまい、間違えたという事実を目を向けることを拒否したくなるかもしれない。しかし、間違えたときこそが学びの大きな機会であるということを理解することが重要である。